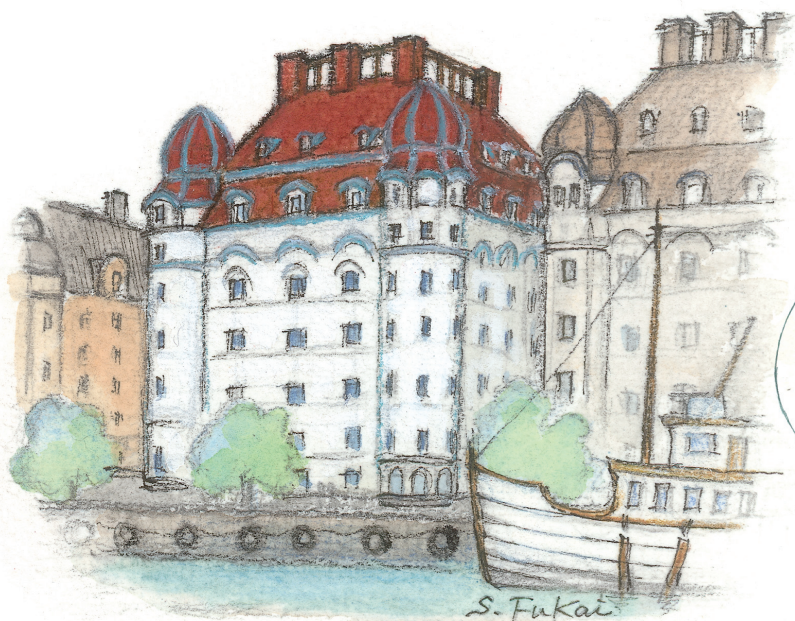
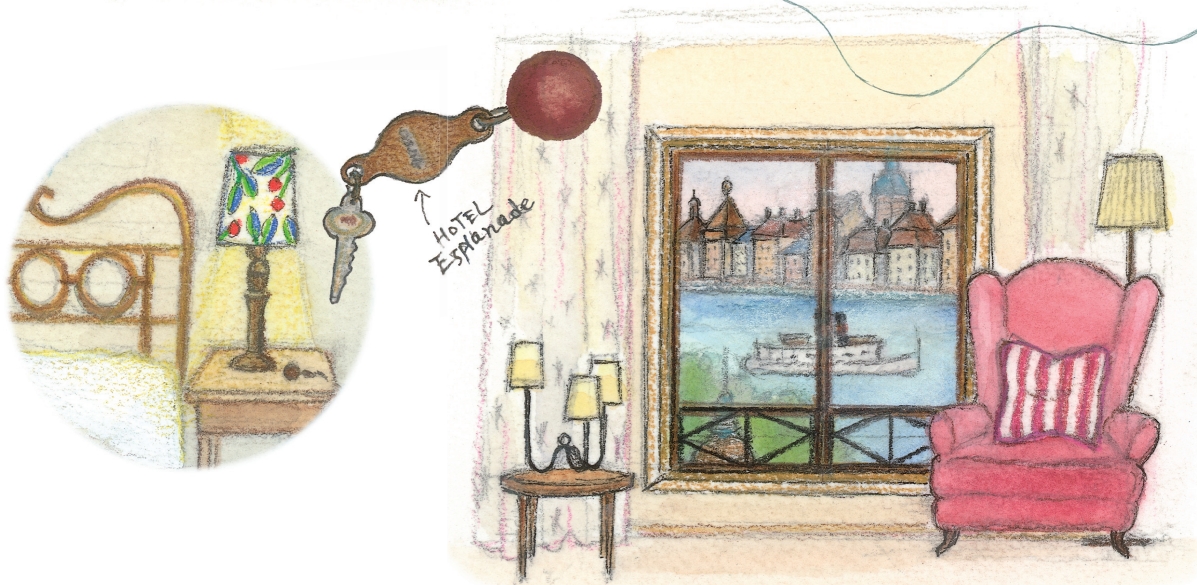




私の小宇宙

Sweden

絵・文
深井せつ子



味わいのあるホテル

自分の感覚に合うホテルに泊まること、それは、私にとって旅の大きな楽しみのひとつ。ストックホルム市内には、何か所かお気に入りホテルがある。でも、それは豪華絢爛でもなく、モダン建築でもない。どちらかといえば渋いホテルかもしれない。

スカンセンがあるユールゴーデン島往復の市電が通る海沿いの道ストランドヴェーゲン美しい通りだ。ヨットや遊覧船が波に揺れ、街並みは中世時代ほど古くはないが、風格ある建物が並んでいる。その中の一つがエスプラナーデ・ホテル。

小さなフロントで丸いボールが付いた鍵を受け取り階段を上って行くと、海側に何部屋もリビングルームがある。どの部屋も開放的な雰囲気でも好ましく、家具調度がクラシック。

ホテルは1910年開業とのこと。映画にもなった『タイタニック号沈没』が1912年だから、それ以前ということになる。

当時の航海待ちリビングルームがいくつもあるのだ（現在も寛いで良い）、大きいホテルという印象を受けたが、現在の客室数は34とか。小規模でとても静かなホテルだ。

一階の朝食室が、まさに古き良き時代の雰囲気そのもの。アールヌーボーの家具が優雅で、ステンドグラスの光も柔らかに優しくかった。

深井せつ子

画家。北欧各国の清涼な風景に魅かれ、北欧行を重ねながら、個展・出版等で作品の発表を続けている。北欧絵本に『イエータ運河に行く』、『風車がまわった!』、『森はみんなの保育園』、他の地域の絵本に『一枚の布をぐるぐるぐる』など（全て福音館書店発行）。

〔ホームページ〕 www.setsukofukai.com

私の小宇宙

Sweden

絵・文
深井せつ子

夏休みは豊かな時間

6月中旬から8月中旬までスウェーデンの学校は夏休み。宿題はほぼ出ない。太陽の輝く島や海辺や湖畔でみな夏を満喫する。

時はまさに白夜の季節。早朝から太陽が顔を出し、夜中になっても薄明るい。だから、電気が無い場所でもランプやキャンドルの灯りで十分見えるのだ。遊びも、釣りやボート、サイクリングなど体を動かすものが多い。また家族や友達と一緒に森へ行き、キノコやベリーを収穫する。

こんなに毎日毎日遊んでばかりで良いのだろうか？

それはたぶん大丈夫。なにしろ大自然が相手なので知恵や知識がないと全てが危険。子どもたちはそれを良く知っている。だから、自ら知識を仕入れ、そしてさまざまな体験を通して大切なことを学び身につけていく。例えば森の恵みには何がどれほどあるのか等々。夏休みは「自然図鑑」から飛び出したもうひとつの学校なのだ。



Profile

深井せつ子

画家。北欧各国の清涼な風景に魅かれ、北欧行を重ねながら、個展・出版等で作品の発表を続けている。北欧絵本に『イエータ運河に行く』、『風車がまわった!』、『森はみんなの保育園』、他の地域の絵本に『一枚の布をぐるぐるぐる』など（全て福音館書店発行）。

[ホームページ] www.setsukofukai.com



私の小宇宙

Sweden

絵・文
深井せつ子

森の妖精たち

北欧の妖精伝説は、小さな老人（ゴブリン）の姿が伝統的。白く長い髭に赤い帽子が特徴だ。スウェーデンではトムテンと呼ばれ、農家の納屋に住む「家の守り神」として大切に思われてきた。

でも北欧画家の絵本を開くと、トムテン以外にも妖精はいろいろ居る。森の老木だったりフクロウだったり…。フィッランドのムーミンは原語（スウェーデン語）で読むと、ムーミントロールと呼ばれる。楽しい一家は妖精なのだ。

そういう北欧の妖精のことを多少は知っている私だが、でも、森の中で楽しそうに遊んでいる金色の髪の子ども達を見ると、「あつ、妖精が居る！」と思ってしまう。

目に麗しく、現実とは思えない瞬間がある。それは、いわゆる西洋の妖精伝説に私が洗脳されているからか、スウェーデンの幼子が美しすぎるからか、どちらなのかしら。



Profile

深井せつ子

画家。北欧各国の清涼な風景に魅かれ、北欧行を重ねながら、個展・出版等で作品の発表を続けている。北欧絵本に『イエータ運河に行く』、『風車がまわった!』、『森はみんなの保育園』、他の地域の絵本に『一枚の布をぐるぐるぐる』など（全て福音館書店発行）。

〔ホームページ〕 www.setsukofukai.com



私の小宇宙

Sweden

絵・文
深井せつ子

キャンドルライト

遠い昔、スウェーデンでは誰でもがキャンドルの光を見つめられる暮らしではなかった。貴族や大地主は別として、普通の人々では、商人や手仕事をする技術職人たちがいる。農家や漁師の家では『カマド』が料理・暖房、そして唯一の灯りだった。

上のカット2点は、中世時代のキャンドル。製本業を営む少しお金持ちの自宅を飾っていたもの。鏡の前にキャンドルが2本突きだしているのは、「光を2倍明るくする工夫。机の上に置く2本立てキャンドルも金属の内側がピカピカで、これも2倍明るくする知恵。キャンドルが高価な時代で、いくつも置くわけではなかったのだ。

現在のスウェーデンは、ほとんどの家庭に電気が送電されている。テーブルのペンダントライトやフロアスタンドなどで室内は明るい。

それでも、みなキャンドルが大好き。食事の時には必ずキャンドルを灯す。ゆらゆら揺れる灯りは、あたりを幸せな光景に変えてくれる。

キャンドルは、いまでも「魔法の光」。



Profile

深井せつ子

画家。北欧各国の清涼な風景に魅かれ、北欧行を重ねながら、個展・出版等で作品の発表を続けている。北欧絵本に『イエータ運河に行く』、『風車がまわった!』、『森はみんなの保育園』、他の地域の絵本に『一枚の布をぐるぐるぐる』など（全て福音館書店発行）。

[ホームページ] www.setsukofukai.com